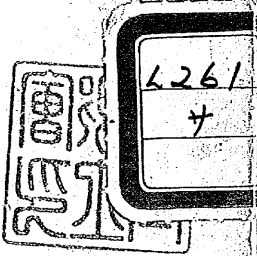


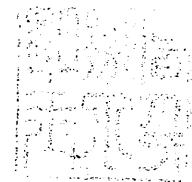
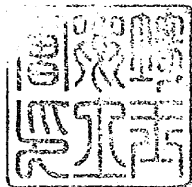


# 忍城戦記





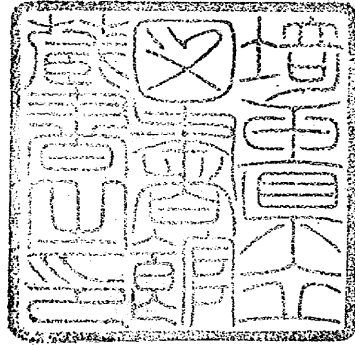
1863 1910  
菲塚一三郎  
眞喜  
贈



忍城戰記

讀家丁日記



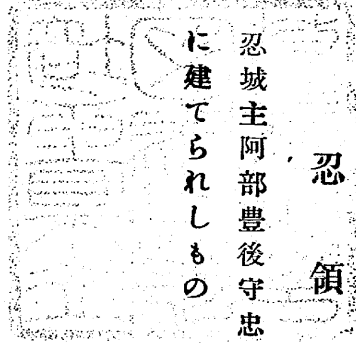


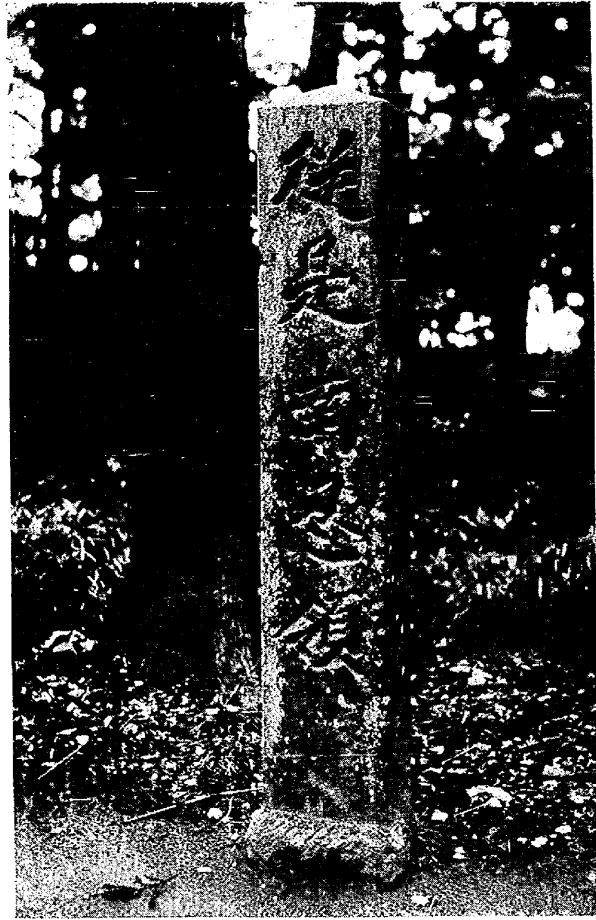
2918

忍 領 碑

忍城主阿部豊後守忠秋公時代に舊熊谷宿の西方一里塚  
に建てられしもの

筆者 不詳





忍 領 碑

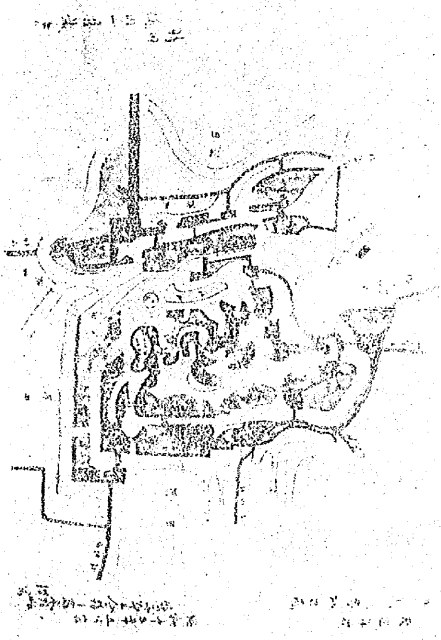


筆 香 不 籍

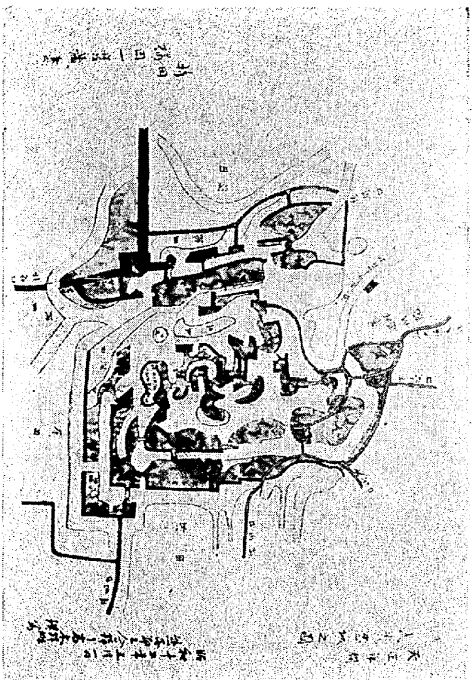
忍 領 碑 丁 字 第 一 号  
 忍 領 主 岡 崎 豊 翁 守 忠 殊 公 耕 升 二 蓄 煎 谷 留 〇 西 式 一 里 冠

忍 領 軒

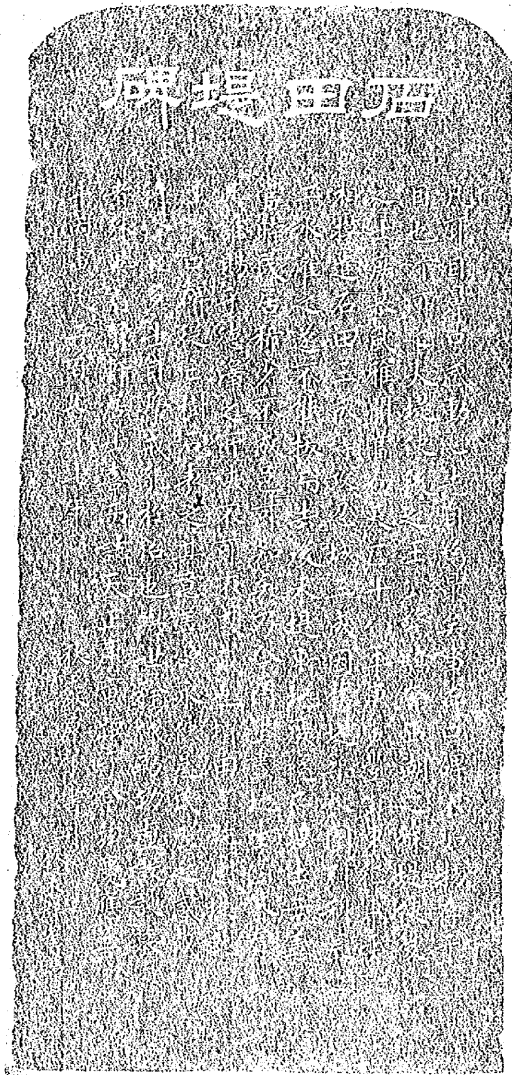
29/8



天正間忍城之圖



天正年間忍城之圖





石田堤碑

凡可目擊口感動心者自為最矣事存口碑不加物存于  
目也汴河之大堤使後之王公警駭奪西湖之蘇堤使後  
之士庶慕風雅聞當初天正八年庚寅豐公東屯軍于  
相摸遺石田三成等致忍城三成因舊堤築長圍引利荒  
三水灌之遂不能拔而去後宋堤漸圯廢地存茲土云蓋  
當時民居稀少不設邑不知夫乃今開墾盡地生齒蕃育  
其誰賜乎德澤之所決不可不感戴也增田豐純慮堤就  
湮沒口碑從亡樹石表之其意蓋欲永使邑民望之感戴  
德澤且多士目擊或亂於治也與世矜伐勒功虛設談墓  
者殊異焉靜軒居士喜而誌天正庚寅距于今茲慶應二  
年丙寅凡二百七十七年

秋巖原筆書并  
鈴木祥甫鐫

## 石田堤

天正十八年忍城水攻の際石田三成

築く所にして碑は北埼玉郡堤根に

在り

今尙其遺跡を存す石田堤は中山道

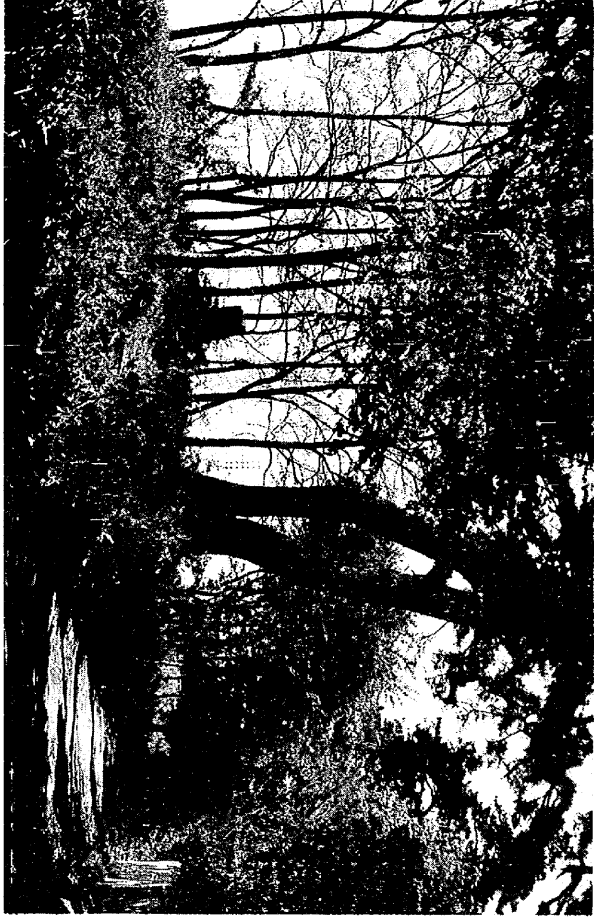
吹上驛の南方より忍城の東方長野

村に達する古堤と別に袋、堤根、

犬井の三村に跨れる堤を改築聯絡

せしめ水を堪へしなり

野田古亭



昔の水多敷へしむり  
 大井の三林に渡る駅も芍薬柳添  
 林に蔭をる古駅を照つ葵、 野田、  
 刈土鞆の南式より野田の東式を理  
 今尚其蔭をる昔を野田駅は中山登  
 丑也  
 葉の根に下りて軒は生れ玉穂野田に  
 天五十八年野田水文の割野田三亀  
  
 野 田 駅

鯨の由來

舊忍城御本丸三重檜上に在りしものにして城下の  
草分名主吉羽小次郎氏が阿部豊後守忠秋公の命に  
より尾州より之を分解し搬入せしものなりと傳ふ  
維新の際廢城となり轉々して新井氏の有に歸す

千葉縣津田沼町大久保 新井綾四郎氏所藏



德川時代  
舊忍城御本丸

千葉總督田沼大元帥 藤井越四郎丑退藏  
 藤井の御親戚と云ふ轉々して藤井丑の首に親を  
 しと具申しと云ふに親し難入せしものなりと書ふ  
 草々等主吉隊小次郎丑を同階豊對守忠妹公の命に  
 書忍城本丸三重御土に丑と云ふの事にして是の

由來の

## 發刊の辭

天正十八年庚寅の春武州忍城水攻の歴史は一般に熟知せらるゝ事と存じますが、其戦記は舊家の櫃底深く藏せられ貴重なる史實の湮滅に歸せん事を憂ひ居りました。

偶々昭和丁丑正月東都の書店に於て忍城戦記の寫本を手に入れましたが私するに忍びす之を公開し一は以て當時殉難せられたる將士各精靈追善の爲め一は此の水攻に際し城主のため身命を賭しよく防禦の術を講し苟も屈せざりし勇敢なる士農商及婦女少年諸氏の忠誠を讚美せんが爲に之を刊行致した次第であります。

今や帝國内外の情勢日に重大を加ふるの際幾分なりとも皇道精神の振作發揚に寄與するを得ば此の上なき光榮に存じます。

昭和丁丑年青葉薫る日

舊忍領熊谷の里

酒井天外

# 忍城戰記

## 忍城攻めの事

天正十八年庚寅の春、武州忍の城主成田下總守長氏、舍弟左衛門佐等、北條氏政に随つて相州小田原に籠る。然る處に同年四月廿九日石田治部少輔三成、大谷刑部少輔吉隆、長束大藏大輔正家、速水甲斐守晴之、堀田圖書之助勝吉、野々村伊豫守雅春、伊東丹波守重實、中江式部少輔有能、中島式部少輔氏種、松浦安大夫宗清、鈴木孫三郎重朝、北條左衛門大夫氏勝、其外關東諸城の降人、都合二万三千百餘人、忍城を圍む。成田の妻女、家人正木丹波守、酒卷鞆負之助、柴崎和泉守、吉田和泉守等を招きて曰はく、敵兵館林城を攻め取つて此の城へ寄せ來る由其の聞え有り。長氏當城に居

らるれば、兵を發して川俣の渡に到り、川を隔て、相防ぎ、時はすんば則ち引退いて籠城す可き處、長氏小田原に在り當城無勢なり。敵は定めし大勢たる可きも、味方籠城して能く之を拒ぐ可し。云甲斐無く責め落さるれば長氏の死生計り難し。百姓町人寺法師等に到るまで悉く城中に馳せ籠り、兵糧五穀の類、日比農人商夫寺社等の畜へ置ける所を早く取り入る可しと云々。正木答へて云ふ。縦ひ小勢と雖も、川俣の渡に馳せ向つて敵を防がん事安かる可きか。然りと雖も關東の諸城悉く敵に降り前後味方無きに、兵を川俣に發するの後、敵兵跡を襲はば忽ち落城す可し。只堅く城を守りて敵兵を防ぐ可き旨評議一決し、一日の内に近郷隣里に相觸れ、米穀數万石を城中に運び取りて而して後所々の持口を定めたり。

### 長野口持

吉田和泉守、柴崎和泉守、三田加賀守、鎌田次郎左衛門、成澤庄五郎、吉田新四郎

三田次郎兵衛、秋山摺右衛門、足輕三十人、農人三百餘人して之を堅む。

此の口の寄せ手は大谷刑部少輔、堀田圖書、松浦安太夫、其外騎西館林の軍勢六千五百人にして長野口北谷口まで引き圍む。

### 北谷口持

栗原十郎兵衛、藤井大學、同右馬之助、横田大學、沼澤兵庫、江田主水、足輕三十人、農人二百人して堅む。

### 佐間口持

正木丹波守、福島主水、長谷部隼人正、内田三郎兵衛、櫻井文右エ門、内田源六、足輕四十人、農人商夫都合四百三十餘人して之を堅む。

此の口の寄せ手は、長東大藏大夫、中島式部少輔、速水甲斐守、並に羽生津久井關宿の



降人四千六百人にして是を圍む。

下 忍 口 持

酒卷鞆負、矢澤玄蕃、酒卷右エ門次郎、手島采女、櫻井藤十郎、堀 勘五郎、青木  
兵庫、足輕百人、百姓町人六百七十餘人して之を堅む。

大 宮 口 持

齋藤右馬之助、布施田彌兵衛、佐藤彌市郎、松岡十兵衛、門井主水、小高右京亮、  
平賀又四郎、此の口寄せ手は、石田治部少輔、北條左エ門大夫、伊東丹波守、鈴木孫  
三郎、並に佐野足利の降人都合七千餘、丸墓に陣して下忍口より大宮口まで之を圍む

行 田 口 持

島田出羽守、吉野源太左衛門、同 源三郎、坂本將監、福田治部左衛門、荻野傳右

衛門、吉野源七郎、足輕百二十人、百姓町人五百人して之を堅む。

皿 尾 口 持

篠塚山城守、松橋内匠、安藤治部左衛門、宮原右近、足輕廿五人、百姓町人百五十  
人して之を堅む。

此の口の寄せ手は、中江式部少輔、野々村伊豫守並に川越江戸加沼の軍勢五千騎し  
て之を圍む。此の口は深田にして人馬の進退自由ならざるの間、各々遠く陣を取る。

持 田 口 持

長塩ヒトヤ囚獄、松本織部、長瀬新六、黒田新六良、足輕廿五人、百姓町人都合百七十五  
人して之を堅む。

寄せ手は此の口を開いて圍まず。其故は、城兵の心一ならず、輒タヤスく攻め落す可き謀

なり。

其外城中佐々野万十郎栗原攝津守、今村佐渡守、山田又右衛門、加藤五郎兵衛、吉野織部、中村主水、大木四郎右衛門、鈴木彈正、藤大炊助、林野市右衛門、伴近林、加藤隼人正、吉羽彦之丞、森傳十郎、吉羽織部、八木原織部、茂松刑部、以上十八人籠つて、所々の門を堅む。又城中持口の外、所々の塀の裏は、十五歳以上の童等に旗を添へて百姓少々是を雜へ、大勢之有るの勢を敵兵に見せしめ、大鼓を預け、若し敵持口の外に攻め來らば、急に大鼓を打つ可き由評定下知有り。其外籠城の女童は、毎日三個度飯を煮て所々持口に持ち運ぶ、城主の室女甚だ知謀有りて勇は丈夫に越えたり敵若し城中に攻め入らば一と合戦致す可き旨用意有つて相待つ。凡て城中の侍は六十九人、足輕は四百廿人、百姓町人寺法師雜兵以下所々持口の人數都合二千六百廿七人なり。十五歳以下の童部等千百十三人、男女都合三千七百四十人して楯籠れるなり。

り。寄せ手は總人數二万三千百餘騎にて城を圍む。

此の城、大沼を抱き四方道窄く、左右深田にして大勢の進退自由ならず、細道に進み、順に攻戦の間に寄せ手は手負ひて死人甚だ多し、城中は兼日約を定めて云ふ何れの持口と雖、味方打勝たば貝を吹き立つべく、味方難儀に及ばば鐘を撞くべし、最も螺大鼓鐘等の數は毎日之を評定し、若し鐘音を聞かば、他の持口より互に助け合ふ可しと議定す。要害尋常より堅き間、急に攻め落さるべしとは見えす、爰に皿尾口の寄せ手二千騎、直に進んで攻め敗らんと欲するや、城中鳴りを鎮めて敵を近づけ、攻口の犬將松橋内匠、大鐵砲を以て敵中に打ち入り、忽ち寄せ手八人打ち殺され手負若干なり。敵は野白に成りて進み得ず、城兵氣に乗りて雨の如く鐵砲を打ち出し、内匠又大鐵砲を本陣に打ち入れ、又敵三人忽ち死傷す、大將驚いて云ふ。此城は沼四方に在りて大勢の進退自由ならず。然るに寄せ來る事餘り近くして、敵の爲め利有つて味方

に利無し、今少し引退いて栖樓を四方に上げ、大鐵砲を以て此方より打入る可しとて陣を引き退く。是より此の口は合戦を止め鐵砲を打合ひて日を送る。

同六月七日、石田三成は近習の兵六七騎を率ゐて陣所を出で小山に登りて忍城を下し見、而して則ち諸將を招いて云ふ今城の體を見るに兵糧玉藥卓散にして究竟の要害なり。故に大勢して攻むれども落ちざるなり。唯今迄關東の諸城輒く攻め落ちし事、或は要害淺間にして防戦せず大勢を恐れて降を乞へるなり。今此城は已に能く防ぐ兵あり。此の城の形勢を見るに、地下くして流水の便有り。所詮は堤を築いて利根荒川を切り掛けて水攻に致す可きか云々と。皆云ふ、此義然る可しと、是に於て石田は則ち近郷隣里に相觸れて云ふ、男女子童に依らず、忍城外に來りて土を運び堤を築く者には米錢を賜ふ可し云々と之に依り近國近隣近郷の農人商夫兒童等、端的に數十万人相集まり、晝夜を分たずして土を持ち運ぶの間、數千間の堤を四五日の中に之を築く。

石田湘謀り米錢を賜ふ事、晝は一人永樂六十文、米一升、夜は永樂百文、米一升なり。此の時城中の農人商夫は錢を以て米を買うて城に入る。奉行人は是の事を聞き石田に告げて云ふ。城中より米を取りて城に入ると。然らば兵糧は盡く可からず。彼の輩は一々召取らへて誅すべしと、石田は云ふ、然らざるなり。堤成りて水を掛けなば、城兵は一人も残らず殺すべし。然らば兵糧幾十萬石有りとも雖も詮無からむ。唯一人も多く之を招集して一時も早く堤の出來る様に相計る可し云々と。故に綺はず。

同月十一日石田三成は、築く所の堤成就せる間、人夫を以て利根荒川を堰留めて江原堤の間に切り掛け、忍の城外數十町四方忽ち河水流入し、漫々として殆ど湖水の如く、湛ふる事六日、人皆、城兵溺死す可き事を哀しむ。然れども城中は敢て水に溺れず、逆浪漲りて道路無し、故に城兵は甲冑を解いて寛き伏し、以て日來の辛苦を忘る。同月廿日小田原に於て、秀吉山中山城守を召して云ふ。汝は忍城主成田と相知る事

久し。試に一翰を遣りて彼を吾に降らしむべしと。山中畏みて陣所に歸り則ち書を降  
成田に馳す。其の狀に云ふ。

一封を捧げて寸志を伸べ畢はんぬ。仍ち年々温問に預かれる事甚だ以て恐悅の至り  
更に以て甚深に候ふ。就中、關八州氏政家人の城々、或は攻め落され、或は降人成  
畢んぬ。然して其御城は酒魚眼前に迫り候ふ。貴翁先祖の家業の絶ゆる絶えざる、昌  
ゆる昌へざるは、唯今に在り。寸志、秀吉御前の儀宜しく執り申すべきの條、急に御  
心を變へられて尤に候ふ。委曲は使者芳意を得べきの條、忝毫に違はず。恐惶謹言。

六月二十日

山中山城守

成田下總守殿

密通の使者をば夜半に出し遣はせる處、恙なく成田の陣所に到る。成田使者に對面

して口上を聞き、且つ書狀を見て以爲へらく、北條家の滅亡近きに在り。名字を相續  
して先祖を祭る事絶えざるやう仕るべき旨なりと。返翰に云ふ。

御内狀の趣、辱き次第、楮上に盡し難し、御前の様子宜しきやう頼み入る外他事無  
し。委細の儀は、御使者の口上の條に任せて管城子を止む、恐惶謹言。

季夏念日

成田下總守

山中山城守殿 回章

山中は成田回章を持ちて秀吉に献すれば秀吉御感あり。

同月廿四日秀吉公の御家人淺野彈正少弼長政、木村常陸介、赤座久兵衛等、昨日武州  
岩槻城に北條十郎氏房の家人妹尾下總守、片岡源太衛門等の楯籠れるを攻め落して後  
忍城の未だ陥らざるの由之を聞き、今夜寅の刻に岩槻を立ち、未の下刻忍に到り、淺  
野長政は長野に陣し、木村常陸介は皿尾に赴き、赤座久兵衛は石田に加はりて崎玉に

屯す。時に石田三成は一手の大將等を招きて云ふ長政既に岩槻城を攻め落して今日忍に到る。定めて急に是の城を攻めむ。若し長政の爲に落さるれば、初より軍功無きが如し。唯願はくば當手の士卒一心に下忍口を攻め破る可しと、皆此の儀に従ふ仍て案内者前に立ち、俄に以て押し寄せ短兵急に攻め破らんと欲す。城兵は俄なるを以て騒動して頗る防戦術を失ふ。時に北の口の大將酒卷鞆負助は相圖の鐘を鳴らす。故に所々の持口より人數を分ちて下忍口を救ふ。敵兵は進んで直に門脇に付き、後陣の大勢も又扉に乗りて内に入らんとする處、加勢馳來りて鐵砲を飛ばすこと雨の如く、扉に乗りて内に入らんとせる輩をば鐘長刀を以て突き落す。此の時石田の軍兵一度に扉に乗り城兵難儀すべきの處、道窄く、左右先後に沼有り、適ま<sup>マダ</sup>渚<sup>ホリ</sup>に入る者は進退途を失ひ唯的に成つて討たる。僅に四五十人、順に進み扉に乗り渚に入る間城兵之を防ぐに便有り。此の時若し寄せ手の總軍一度に諸方の口々より攻め入らば落城すべき處、

石田は兼ねて諸方に狀し合せず、唯一身の功を立てんと欲せるが故に、諸將は徒に見物するのみ。是に於て石田の兵忽ちにして三百餘人討たれ、手負ひは五百人に及ぶ。此の時淺の長政は長野に在り、巳午方に當りて時の聲、矢叫の音を聞き、搦手既に城を攻む。若し落城に於ては無念の次第なり。急に押寄せんと、長野より出張りて一度に堀を越え柵を破りて木戸口に附く。城兵暫く相防ぐと雖も大勢所々より押入る間、頗る手を以て水を防ぐが如し。城兵評議して云ふ、堅く木戸口を防ぐと雖も、大勢所々より込入るの間、後を敵に取り切らるれば叶ふ可からず、所詮は此の口を捨て行田勢と成合ひて相戦ふ可しとて引き退く。寄せ手は氣に乗りて是を圍み、彼を要して攻め戦ふ間、城兵大勢討たれ、漸く逃れて城に入らむとせる處、淺野長政眞前に進み、城に附け入る可き旨下知す。城兵柴崎和泉守、吉田和泉守、同 新四郎、三田加賀守、舍弟二郎兵衛、鎌田次郎左衛門、成澤庄五郎、秋山總右衛門、其外城中より加勢を爲

し、吉野織部、鈴木彈正、大木四郎右衛門等踏み止まり、踏み止まりて相戦ふ。此の間に足輕農人等漸く城内に引き取り、既に八人の城兵門内に入らんと欲せる處、大谷刑部少輔、堀田圖書助等の組の輩、青山九郎八、飯沼主水追ひ番ひて門に入らんと欲す時に鎌田次郎左衛門、成澤庄五郎、秋山總右衛門三人は猶ほ橋上に踏止まり、鐘を以て折敷き突き立て突き立てて相戦ふ。橋窄くして前登の兵辟易して敢て進み得ず。鎌田云ふ、急に木戸を下す可しと。

兵卒則ち木戸を下す。此の間に敵の大勢競ひ來りて三人は一所に討死す。敵は氣に乗り門に附し扉に乗らんと欲す。城兵は防ぎを兼ねつゝ鐘を鳴らす。時に正木丹波守は五十余人を率ゐて佐間口より出で、敵の後に廻つて鐵砲を放ち、鯨波を發して裏切有る由を喚き叫ぶ。是に於て敵は騒ぎ立ちて引き退く。城兵は勇み門を開いて突いて出づ。正木は力を得て之を追ふ事甚だ疾し。半途にして敵を追ひ捨て輕ろと兵を入る。

此の時長東大藏大輔正家は、行田下忍に合戦有るの由を見て、俄に兵を進めて佐間口を攻む速水甲斐守、中島式部少輔其外羽生津久井關宿の軍勢、我劣らじと押寄せたるも、道窄く人多くして進退自由ならず唯順に進む。此の口の大將正木丹波守、五十餘人の兵を率ゐて行田口を救ふ間、當手は以ての外の無勢なり。此の由城中へ聞す。今村佐渡、山田又右衛門手勢を率ゐて出で來り、弓を引き鎗を以て一方相防ぐ。其の外福島主水、長谷部隼人、内田三郎兵衛、同 源六、櫻井文右衛門以下馳せ廻つて鐵砲を打たしめ、長東の老臣家所帶刀、白杵平四郎、一宮喜兵衛、有坂宮内以下十人許ひしひしと門脇に附くや、長東正家下知を爲し、先登の兵討たすな續け者共よと兵を進むる處に、正木丹波が長野口の寄せ手を追捨てて佐間口より城中に入らんと欲するを、敵兵見て行田より後詰を致すと、心得周章で騒いで人數を引取る。誰追ふ者無しと雖も、或は橋より堰き落され或は深田に馬を乗り入れて進退を失ふもの若干なり。

討たれし者は無しと雖も、武具悉くけがれて見苦し。此の時城中より突き出でなば、寄せ手の大勢討たるべきの處、小勢故に出でずして唯だ勝時を作り螺を鳴らすばかりにて出で追はず。

日暮道見え殿して引く。味方は敵追ひ來ると心得、足を亂して逃げ走り本陣に留まらざる者若干なり、凡て今日の合戦に、長野口の寄せ手の手負死人は四百餘人に及び、城中も又侍三人足輕十二人農人商夫八人若黨九人都合卅二人討たれ、手負は四十八人に及ぶ。下忍佐間長野三方の寄せ手若干討たれ或は疵を蒙る者數を知らず。酉の下刻各々本陣に歸る。

同月廿五日早朝小田原秀吉公の御陣所より飛脚到來す。諸將會合して書狀を披見の處、秀吉仰せと稱して山中山城守より申す旨あり、其の詞に云ふ、成田長氏事、志を秀吉に通じ、某に附いて降を乞ふ。仍て則ち免許有り。城未だ陥らざらんには早く圍

みを解いて東州に來たれ、若し従はずんば城をば攻め取る可き有らんと。之に依り石田は則ち右の趣を城中に告げ、今日の午の刻に城を請取りて陣を拂はんと。城中の男女籠を出づる鳥の如く悦ぶ。今度正木丹波守の武勇をば敵味方共に之に感じたり。

天 正 十 八 年

右戦記は、武州南河原今村氏家藏の本を求めて之を寫す。今村氏は佐渡守の末孫也  
寛政十年正月七日書き寫し畢んぬ。

成田左衛門殿泰親九代

隆見齋元維（華押）

文化二年二月二十八日堀和氏ヲ以テ寫サシム吉田隆見齋所藏タリ。

小 彰 信（花押）

# 忍城之記

村越源太郎述

内廊の部

忍城は武州北埼玉郡に在り地勢曠渺平夷にして水田最も多く其間村落基布し自然の排置眺矚眞に極むべからず、西南に荒川を帯び遠く之を望めば赤城榛名の翠黛秩父諸山重障突兀逶迤斷續點綴す東北に刀根川を控へ遙かに之に對すれば日光筑波の青螺恰も媚を呈するもの如し位置を二大河の中間に占め街衢縱横市廛櫛比亦是れ東武の一小都會なり。建久の頃忍氏なるものあり。既に此地に住す爾來騷亂相續く成田親泰勢最も強く城を築き(浮城の名あり)以て近隣を睥睨せり(其子長康其孫氏長三代の居城とす)後小田原北條氏に屬す天正十八年北條氏滅亡と共に氏長野州烏山城に移さる同

年松平家忠の所領となる文祿元年松平忠吉代りて之を領す。寛永三年酒井忠勝の封に歸し同十二年松平信綱の居城となる。同十六年阿部忠秋の所領たり文政六年其子孫正權(幼名鐵丸と稱す)奥州白河に移封迄正能、正武、正喬、正允、正敏、正識、正由を経て正權に至る九世百八十五年秋在世の際専ら心力を城廓、櫓門、壘壁壕渠の修理に盡し、大に面目を一新せり、同年松平忠堯勢州桑名より此地に移され十萬石を領す忠彦、忠國、忠誠、忠敬に至り既に五世廢藩置縣に至る迄四十九年とす。抑忍城は關東名城の一にして忍及野州の唐澤山、宇都宮、新田の金山、厩橋、佐竹の太田山、武州の河越之を關東の七城と稱す城地の風光壘上には松杉繁茂し、本丸の如きは殊に鬱蒼として晝尙ほ暗く更に天日を見ることが能はず其旭日に映するは以て常磐の色を現し風に響きては千代の聲をなせり。壘外の深沼は水波潺々として大湖に等しく萬頃の綠を疊む水上には鴛鴦、鳧、雁、翔翺し金鯉銀鯉浮遊して樂しめり是れ皆國家萬代の瑞



詳にして古の所謂靈沼靈臺とやいふべけん。然るに年移り星換り嘗て池邊義象當地に  
來り其の荒廢せる現狀を視て詠せし。

いたしへの忍の大城の跡かれて

あしの葉かくれによしきりの鳴く

といへるは是れ即ち忍城墟に於ける麥秀の歌にして能く今日の光景を描寫し盡した  
るものと謂ふべきか。

#### 外 廓 の 部

牙城は老杉鬱蒼として晝猶暗きを覺え、一も館舎なし東壘の隅に樹あり懸鐘松と呼  
ぶ。其樹幹は盤臥して水に映ず、雅趣愛すべし。成田氏の時陣鐘を懸けし樹なりと云  
ふ。北に一廓あり、之を諏訪曲輪と云ふ。諏訪神社あり南面の門を出づれば則ち二の  
丸なり。藩侯の居殿あり、其表門は東面す。次で太鼓門と云ふ出づれば則ち三の丸な

り。藩老山田大隅の邸あり、成田門あり、南行すれば左側に金庫米廩あり、藩士の食  
祿を此處より頒つ。左折すれば三層の樓櫓あり、調馬場あり、牛伊奈利祠あり、内沼  
橋を過ぎ外張に至るの間道あり、伏して壘下を出で放鷹場に沿ひ、以て下忍門外に達  
すべし、東照公遊獵の時此間道の要害を激賞ありしと傳ふ。外張を出づれば左に老侯  
の館あり、橋上に立ち北方水を隔て、武器庫及び二層樓櫓を望む。南は則ち煙波港々  
遙かに松樹の間に水戸殿稻荷社を眺む。是を城中佳景の隨一とす。次で外沼橋門と云  
ふ公厩あり常に數十の軍馬を畜ふ。新沼橋を渡り内行田に至り左折數百歩に東面する  
門あり是を東正門と爲す。則ち追手門なり、堞上に巨楓あり抱圍數丈餘秋冬の交爛然  
として霜に飽く南北に外張あり北は即ち新店街に出で、南は獄舎なり。其前を過ぐれ  
ば行田の新町に出づ。内行田の北端に北谷門あり。北谷町に出づ。更に南端には向吹  
門あり門を出で江戸町又は同心町を経て天満門に至り天満町に出づ。成田門の南熊谷

門次で無開門（一）に不建門と云ふ）あり此邊幽寂にして往々妖怪を見ると云ふ。左折西行し更に左折して南面すれば下忍門あり之を南正門と爲す。即ち搦手門なり。門上に綱引松あり、常に鶴蒼として風致を存す天正十八年城中は既に侵水せるも、更に苦策を運らし太綱を繋ぎ上に門扉を列べ、而して灰を撒き馬を立て、城地の高壇なる状景を示せし所なりと。（當時敵の本營は東商渡柳村に在り）東西外張あり。東方に一帯低地葦蘆叢生する所あり之を放鷹場と爲す。南すれば下忍駒形に至る。西は則ち下荒井なり、東照公の祠あり、進修館あり、藩士の修學所なり、西行して大宮口門に至り大宮口に出づ。

二の丸の東隅に鐘樓ありて晝夜時を報す。沼中に二島あり一を薮島、他を姥島と云ふ。左折北向して牙城を隍に沿ひ米廩あり武器庫あり。二層樓櫓あり又左折米廩ありて裏門に至る右側には菽倉あり二層樓櫓あり裏門を通じて上荒井に出づれば風姨神社あり、南行中荒井を経て下新井に達す。

上荒井の西南に一門一橋あり此の橋を縁切橋と云ふ。成田氏の家臣某忍城の陥落を憤慨し刀を挫く曰く爾來武士道の縁を絶つと。橋を渡れば片矢場なり。左折南行武士止と云ふ所あり、天正の役適兵の浸入を防止せし爲なりと、次は田町と云ふ。左折三角形屋敷を過ぎ大宮口門に至るべく右折すれば持田口門にして持田村に出づ。

片矢場の北を涙橋門と云ふ。前きの刀を挫くの土が啼泣して去りし所なりと。次を内矢場と云ひ左折西行すれば皿尾門あり皿尾村に出す。

内矢場の東に作事場あり、土木事業を管理經營する所なり其北に百間長屋と云ふ一部あり、之を過ぎて帶曲輪に至れば多度、一目連の兩社あり、松平侯桑名より遷じ祀れる所なり。帶曲輪門を過ぎ地獄橋を経て北谷町に至る。是を左折北向すれば蓮華寺町となる。再び左折右旋すれば長光寺町に至り六つ門に達す（この六つ門とは朝夕六時

を以て開閉するため此稱呼あり。門を出れば則ち谷郷村なり更に北谷町の中央より東行すれば丁字路に當る。左折せば東町。右折すれば行田町に出づ。城の周圍は二里半と稱し其間に沼澤河溝交互錯綜す。要するに水陸相半ばするものと云ふべし。是れを忍城内外廓の大觀とす。

以上の外、山鳥、裏町、表町、百石町、袋町、横町、沼尻、新組、外矢場、裏矢場、鷹部屋町、代官町、仲町、南町等々の字あれども之を省畧す。

### 石田堤碑

凡そ耳目鼻口の心志を感動するは目を最と爲す。事の口碑に存するは物の目に存するに如かざるなり。汴河の大堤は後の王公をして驕奢を警め西湖の蘇堤は後の士庶をして風雅を慕はしむ。聞くならく當初天正十八年庚寅豊公東征し相模に軍するや石田三成等を遣はして忍城を攻めしむ。三成舊堤に因りて長圍を築き利荒二水を引きて之に灌ぎしも遂に抜く能はずして去る。後來堤漸く圯廢し纔かに茲地を存するのみ。蓋し當時民居稀少にして邑を成さざること知る可きなり。乃今開墾して地を盡し生齒蕃育す。其れ誰の賜ぞや。德澤の渙ふ所感戴せずんばあるべからず。増田豊純堤の湮没し口碑従つて亡ぶるを慮り石を樹てて之を表す。其意蓋し永く邑民をして之を望んで德澤を感戴し且つ多士をして目撃して亂を治に戒めしめんと欲すればなり。世の矜伐

功を勤し。虚しく諛墓を設くるものと特に異なるなり。静軒居士喜んで誌す。天正庚寅は今茲慶應二年丙寅を距ること凡そ二百七十七年なり。

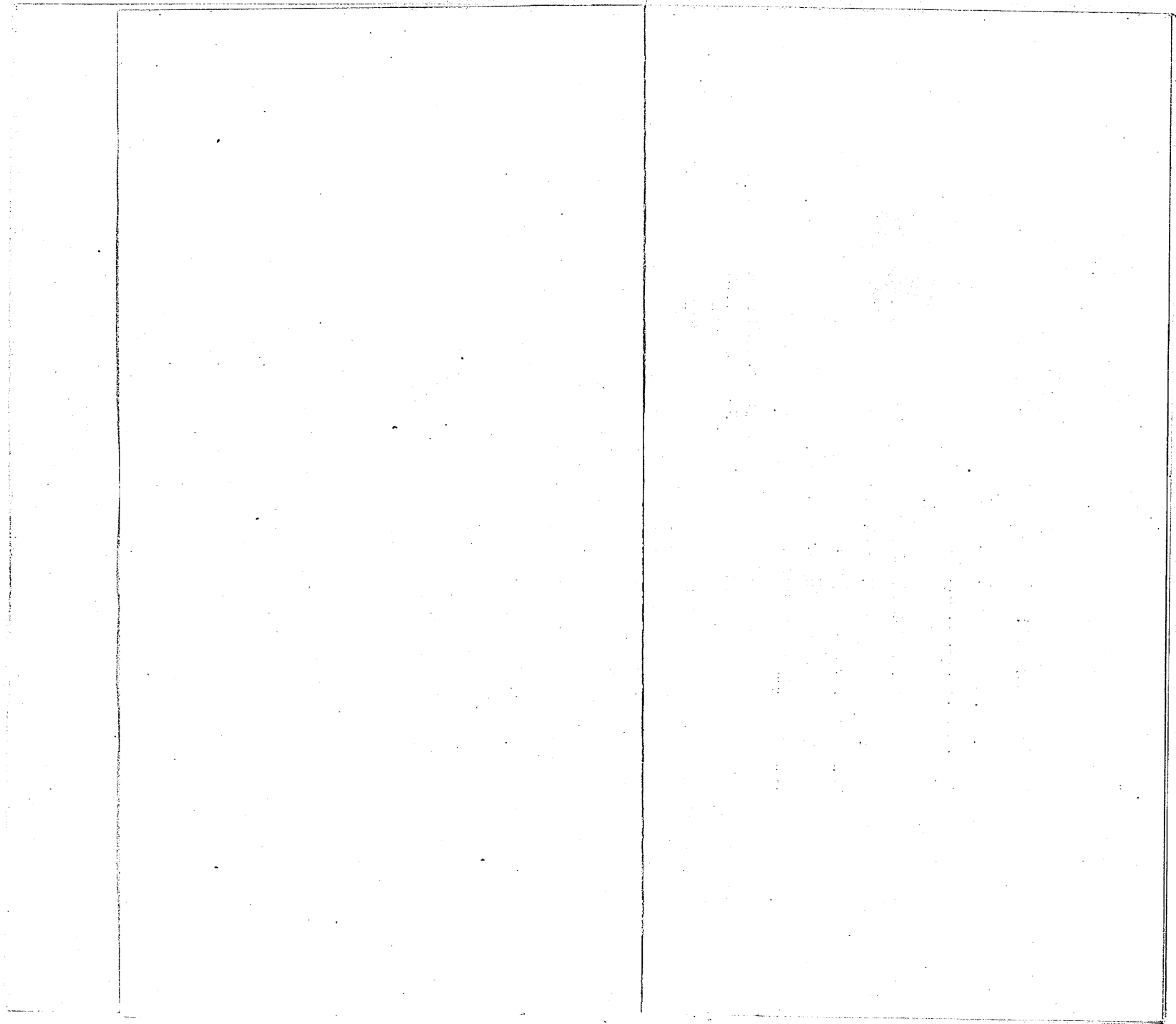
秋 巖 原 鞏 書 丹

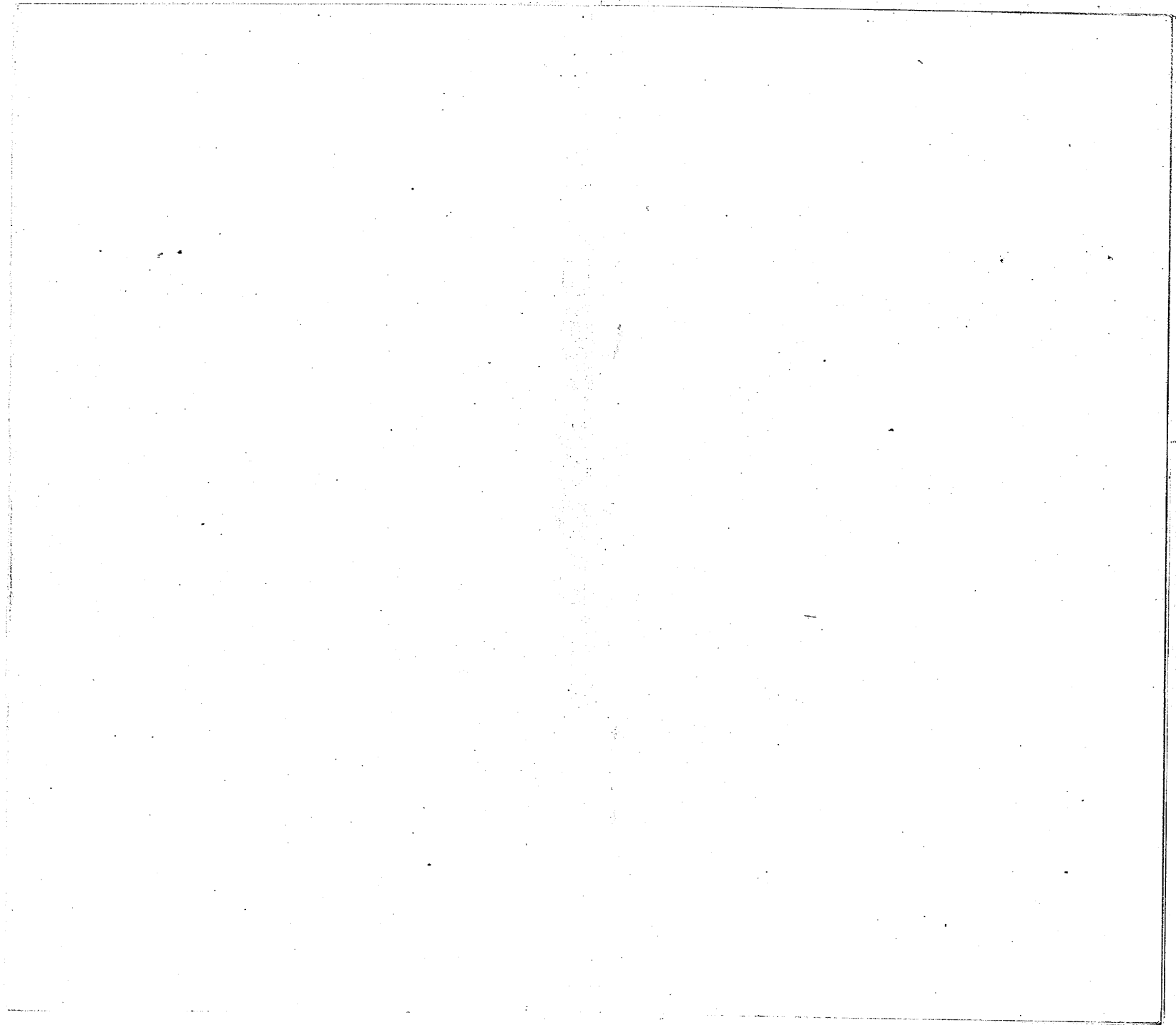
昭和十二年六月一日印刷  
昭和十二年六月三日發行

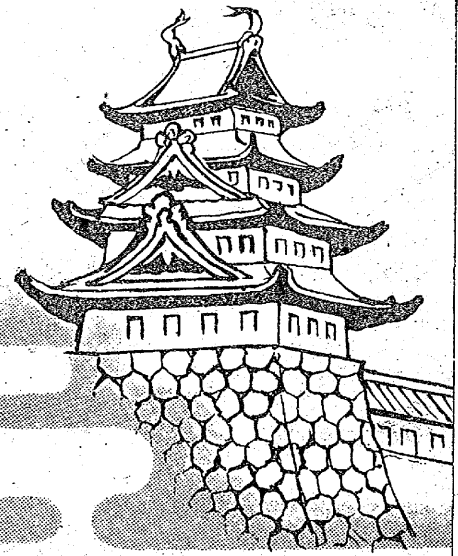


著 者 酒 井 天 外  
發行人 酒 井 惣 七  
埼玉縣熊谷市大字熊谷二百十二番地  
印刷人 三 ヶ 尻 正 夫  
埼玉縣熊谷市常盤町五百七番地  
印刷所 雄 文 閣

【非賣品】







いにしへの大城の跡を  
あふくかきよめる

徳  
主  
義  
書

埼玉県立図書館



31015113